



南海地震の語り継ぎの現状と課題 : 徳島県海岸部を事例に

森, 康成

(Citation)

兵庫地理, 64:79-94

(Issue Date)

2019

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006044>



南海地震の語り継ぎの現状と課題

—徳島県海岸部を事例に—

森 康成

I. はじめに

大地震について語る時に、「継承」や「風化」という言葉を含めて語られることがある。広辞苑（新村 1992）で「継承」を引くと「うけつぐこと。承継。『戦争体験を 一する』」とある。「風化」は、「①徳によって教化すること、②地表及びその近くの岩石が、空気・水などの物理的・科学的作用で次第にくずされること。比喩的に、心にきざまれたものが弱くなって行くこと。『戦争体験の 一』」、③硫酸ナトリウムの（省略）」とある。地震や震災に関連し風化と言うのは、②にあたると考えられる。このことから考えると、話題としている災害について「継承」や「風化」という言葉で語る時、語り受け継がれ心にきざまれてきたことが弱まってきている状況を示していると解釈できる。

西日本では次の南海地震の発生と被害が懸念されているが、このような中で、過去から学ぶという点で、過去に発生した南海地震の語り継ぎはどのようなになっているのだろうか。ここでは、南海地震の語り継ぎの現状と課題について考えてみたい。

災害の語り継ぎについては、様々な観点からの研究が考えられる。被災地では博物館やミュージアムでの伝承があり、そこでは展示による記憶の想起により災害の記憶が継承されているという研究（坂本・矢守 2010）や日本や世界の災害ミュージアムの被災経験の語り継ぎと防災・減災についてのフォーラムなどがみられる（TeLL=Net フォーラム実行委員会 2015）。また、公的施設における語り部の活動について、人と防災未来センターにおける語り部と聞き手の対話に関する考察（高野・渥美 2007）や野島断層保存館の語り部活動を事例にした防災教育における震災語りべ活動の分析と提案（森 2018）などがある。東日本で

は、2011 年の東日本大震災以後、語り部活動が活発に行われているが¹⁾、災害の経験を伝える活動の最新動向の研究（佐藤 2015）では、被災から数年の東北地方では、現地案内や口頭伝承による活動が中心であること、恒久的な施設より仮設的な展示がみられること、どのように伝えるかの勉強会を行っていることがあげられている。また、集落としての災害の語り継ぎ活動はどうなのか、という点に関して「被災した集落遺産のその後」（白石 2018）や、吉野川流域の災害文化として洪水地域で高い台座に残る高地蔵が住民の洪水に対する意識を示しているとする研究（濱井 2014）などがみられる。徳島の津波常襲地域の海岸では、津波被害に関連した石碑や遺物があり、これらに関する書籍や冊子（徳島県教育委員会教育文化課 2016、木村ほか 2002、徳島県立文書館 2016 他）やインターネットアーカイブス（四国クリエイイト協会）などがみられる。

このように見てくると、語り継ぎは様々な形でなされていることがわかる。特に東日本大震災の被災地では語り継ぎ活動が活発であることもわかる。しかしながら、今後の南海トラフ地震での被災が想定される地域の人々の間でどのように南海地震が語り



第 1 図 徳島県海岸部市町

継がれているのか、だれから誰にどのように、どのような場で語り継がれているのか、また、データとしても具体的な研究はほとんど見ない。ここでは、過去の南海地震で甚大な被害があった徳島県の海岸部（第1図）を取りあげて、語り継ぎの実態の解明と課題について考察する。

以下、徳島県における過去の南海地震の被害を概観した後、家庭内と公の場に分けて、どのような内容がどのように家庭内で語り継がれ、さらに、家庭外での一般の人を対象にした語り継ぎではどのように語り継ぎがなされているのかについての調査と考察をし、まとめをする。

II. 徳島県における南海地震の被害

徳島県は、過去に南海地震が発生するたびに甚大な被害を被ってきた。昭和南海地震やそれ以前の地震を取りあげて、被害状況などをみてみたい。

昭和南海地震は、昭和21年12月21日午前4時19分に発生しM8.1であった。徳島県内の被害は、「震度Ⅴ（著しい水平動で外に出てもたつてもいられないほどであり、また、地割れや建物の被害あり）・・・津波は日和佐3メートル、牟岐4.5、浅川4.7、宍喰4.5、」で、死者は牟岐53、浅川85と抜き出ており、徳島県全体の死者は166人に上っている（徳島県史編さん委員会1967）。この昭和南海地震については多くの記録や出版があり、牟岐町と海南町の記録には次のような内容がみられる。

海南町（現海陽町）の浅川の記録（『宿命の浅川港』1986）では、女性の「当時家族はおてら・・・7人やった。・・・地震がゆったさかい『もうやむんかいな』・・・ほんなことばかり考えながら部屋で子供に添え乳させよった。・・・ほいたところが、近所は、皆にげてしもておらんのやもん。・・・駒沢の前へ行ったらもう水がザブザブしとて胸まで上がってきた。・・・長女は4女を負うとるし、ねんねこがびしょびしょになつとるから、からだが重とうてよう上がらんかったんやろ。・・・長女と4女が西の町で死んどった。下の子はねんねこから抜けて・・・」という記録など、なまなましい40人近くの証言が載せられてい

る。浅川で、死者85名、全壊364戸、流失家屋441戸の被害が記録されている。

牟岐では、「地震やみたる後沖合に高潮の襲来しつつあるを発見し地震のやみたる後約10分・・・にして津波の襲来があった」。当時の記録では「ガタガタとゆるぐ物音で熟睡の夢を破られた真っ暗闇の宿直室。地震だ。・・・立つことができず・・・。非常口をと思って

玄関を開けようとしたが駄目だ。・・・やっとこせ開けて・・・時計を見ると4時22,3分。・・・外の様子はだろうと理科室の横まで来た時ゴーという異様な音が港から聞こえる。津波だ！・・・『津波だァー』とどなりながら郵便局をまがって下の町を真一文字に駈に向かつて走った。」という地震と津波の様子（牟岐町史編集委員会、1976）が記録されている。死者が52名で、第1表で内訳をみると、男女別では女性と、年齢では高齢者と子供の死者が多い。倒壊住

第1表 昭和南海地震での牟岐町の死者数

資料：牟岐町史

	60歳以上	16歳以上	15歳以下
男	6	5	9
女	10	14	8
合計	16	19	17

家265戸、流失住家109戸があった。

さらに古い安政南海地震やそれ以前の記録として『震潮記（しんちょうき）』（田井2006）、『嘉永7年大地震の記・南朝以来地震抄録』（徳島の古文書を読む会5班2008）がみられる。前者は徳島県南部の海部郡海陽町宍喰の田井家に残る古文書の現代文訳で、永正9年（1512年）、慶長9年（1605年）、宝永4年（1707年）、嘉永7年（1854年）の地震津波について書かれている。宝永4年10月4日について抜粋すると「浅川（海南）、牟岐浦は家一軒も残らず流失し、両浦の死者は三百余人であった。宍喰浦でも多くの家が流失し、溺死者は十一人ばかりであった。」と書かれている。これは、宝永4年10月4日震潮の旧記の写しからのもので、昔の文書が書き写されて残っていたということも示している。後者は徳島県中部海岸の小松島市の多田家

に残る写本を古文書を読む会が解読したものである。嘉永7年の大地震については全国各地の被害はもちろん徳島の「下福井村八十八家の内四家流、五十四家大破、…

(略) …田井村四十家の内七家潰、十六家大破、突浪先此浦へ入、引立て由岐へ入しといふ、男一人死す…(略) …牟岐東浦三百五十八家の内三百五十六家流、二家汐入、十七人死男九人女八人…(略) …浅川浦式百余家皆流失、寺三カ所大破、男女三人流死」などのように徳島藩の海岸集落の被害が述べられている。

Ⅲ. 家庭内での語り継ぎ

上記第Ⅰ章では徳島の海岸部には石碑などの過去の被害に関連した遺物があること、Ⅱ章では文書の形で過去の被害が伝えられていることを確認した。石碑や文書についての研究会や報告会はあるが²⁾、そこに住む人々がどのように語り伝えているのかという点については、資料がほとんど見当たらない。個人的に語り継がれている場として家庭を想定し、語り継ぎの実態はどうなっているのかを調査した。

1) 語り継ぎの実態調査

著者は、語り継ぎに関心を持って、被害の発生した最近の地震の聞き取りでは、その地域での過去の地震やそれに伴う津波被害などの聞き取りもしている(森・中野 2015、2018)。2015年2月6日に徳島県南部を震源とする震度 M5.1 の地震が発生した。地震直後から5月はじめにかけて震源地の牟岐町の住民に「南海地震について、親、祖父母から聞いたことがあるか」を尋ねた。語り継ぎでは、近所の人に聞いたなどの回答も考えられるが、調査はあくまで、「親、または祖父母」から聞いたか、である。80、90歳の人は、さらにその親や祖父母から聞いたか、である。したがって、90歳くらいの人ならば、祖父母は安政の南海地震の話に当たり、50歳くらいの人ならば昭和南海地震の言い伝えや、さらにその前から伝わっている安政南海地震の言い伝え

第2表 親・祖父母からの南海地震の語り継ぎ

南海地震の体験	親・祖父母から聞いた		親・祖父母から聞いたことはない		合計人数
		年齢層での割合		年齢層での割合	
体験あり	17	65.4%	9	34.6%	26
体験があるが覚えていない	8	72.7%	3	27.3%	11
年齢的に体験あるが未確認	2		0		2
年齢的に体験ない	35	68.6%	16	31.4%	51
合計人数	62	68.9%	28	31.1%	90

ということが考えられる。調査は、牟岐町の津波が想定される地域を中心に街頭調査を実施した。地区が重ならないように移動しながら、また、同一家族にならないようにしながら、漁業や農業で戸外で働く人、商店で働く人、家の外で作業する人、散歩中の人などに尋ねた。その結果、118名の回答者の中から、地震時に牟岐町に在住で、牟岐町で地震を体験した101人の回答をデータとした。男女の割合は男6:女4である。被調査者の年齢は第2図のようになっており、高齢者の割合が高いデータとなっている。牟岐町の高齢化率は2016年4月で46.7%(2016年4月牟岐町役場で聞き取り)である。調査結果は、親・祖父母から聞いた/聞いていないと、昭和南海地震の体験のある/なしで分類して集計をした(第2表)。分類では、60代男性の「体験した親から、夜やった、明け方やった、大きかったなどいろいろと聞いた。」は「年齢的に体験なし」で「親・祖父母に聞いた」に、70代男性の「おじいさんが船に乗っていた。ここらやられている。家は流れていない。おかしいときは川を見る。一瞬にしていなくなる。(略)」は「体験あり」で「親・祖父母から聞いた」に分類した。

被調査者全体では、親・祖父母(義理の親・祖父母も含む)から過去の南海地震について聞いたという人は7割近く存在する。昭和南海地震の体験があるかないかで年齢層を見ると、親・祖父母から南海地震について聞いたという割合は南海地震の体験があるが覚えていない人の方が年齢的に体験のない人より数ポイント高い。この2つの年齢層のデータ

で差があるのかクロス集計でカイ 2 乗検定の結果、有意確率=0.801 >有意水準 $\alpha=0.05$ となり、年齢層による差はなかった。したがって、牟岐町では年齢にかかわらず7割近くの人が親・祖父母から南海地震について聞いているということになる。

牟岐町の家庭内での7割弱という過去の南海地震の語り継ぎについて、割合が高いのか低いのか、判断は難しい。その特徴を見るために、他の地域のデータと比較してみる。比較する愛媛県愛南町、兵庫県洲本市は過去に南海地震で津波被害が発生している地域で、それぞれ最近の震度5弱の地震後の調査である。災害環境や地域の環境が似通っており、また、聞き取り調査においても被調査者の年齢や性別の基礎データに統計的な差がないことが確認されている（森・中野 2018）。第3表からは牟岐では語り継ぎが他の2地域に比較して高く見えるが、地域

第3表 各地域における南海地震の言い伝え

		言い伝え		合計
		聞いた	聞かない	
地域	牟岐	62	28	90
	愛南	14	45	59
	洲本	31	62	93
合計		107	135	242

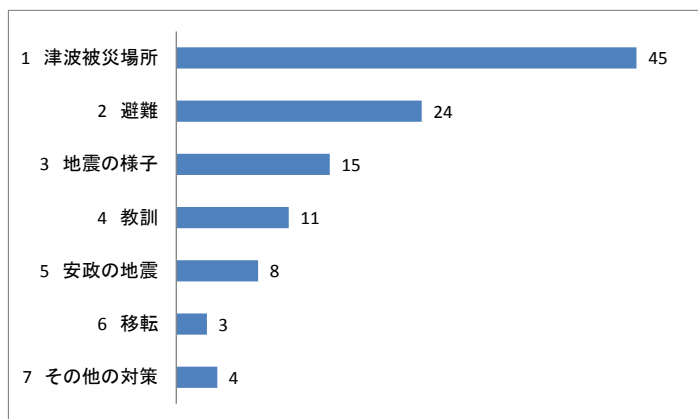
第4表 地域による南海地震の言い伝え比較

		言い伝え	
		聞いた	聞かない
地域	牟岐	5.9	-5.9
	愛南	-3.6	3.6
	洲本	-2.7	2.7

差があるのかクロス集計カイ 2 乗検定をした。有意確率=0.000 < 有意水準 $\alpha=0.05$ で地域の言い伝えには違いがあると言える。残差（第4表）を見ると、牟岐では親・祖父母からの語り継ぎがよくできていると言える（残差 5.9）。

2) 語り継ぎ内容の分析

親・祖父母からの語り継ぎに関する質問では、聞いた/聞かない、という質問に関連して被調査者が聞いている内容などを語

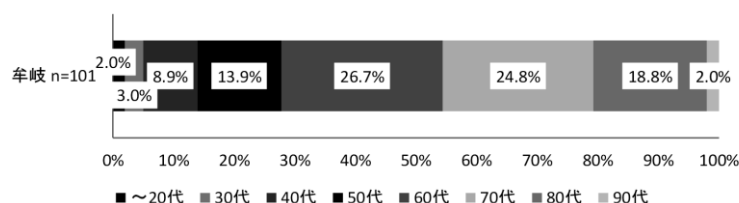


第3図 内容の分類 n=62人 複数分類（110項目）

った。親・祖父母から聞いていない場合でも語り継ぎについて語る場合もあったが、ここでは、親・祖父母から南海地震について聞いたと回答した62人の内容を取りあげた。内容については自由回答であり、著者はメモを取り、ほとんどの場合許可を得て録音をした。その内容を著者が話し方の基本文型³⁾を念頭に、内容の多いものにラベルをつけて第3図のように分類をした。一人が複数の事を語っている場合があり、分類による項目は110を数えた。分類結果、津波被災場所と避難についての内容が半数以上を占めた。以下、各項目を概観する。

(1) 津波被災場所

話し方の基本では、誰がというのが話の初めに来るが、ここでは親・祖父母と限定し、さらにいつというのは南海地震と限定しているため、話の内容としては、どこでどのようにという点から始まる。多くの場合体験者のいた場所への言及がある。71歳男性は聞いた話を「前の川、潮がガラガラ引いて行く、だーっと。ものすごい勢いやから、磯がガラガラ。当時ここは、昔は前に家がなかった。堤防は低かった。川は見やすかった。途中舟上げるのに開いてい



第2図 被調査者の年齢

て、そこから水が来た。母屋の真ん前が開いていた。小さい船が打ちあがって家の中へ突っ込んだ。壁は 1.5m 位まで色違いで土にシミが残っていた。前に壁を張り替える時に見たら、あーここまで津波きとったんやな、と分かる。今、ベニヤ板貼って隠してある。」と述べている。津波が川筋を遡上してきたこと、堤防があったが、船を引き上げるための堤防の切れ目から浸水している状況がわかる。川と船をあげるための斜路と堤防の切れ目、自宅の壁に残る水位の高さで場所が言い伝えられている。80 代女性は「お婆さんから、昭和 21 年。ここまで津波来ない。川に沿ってきた。この家の一段下の田んぼまで。今は、ならして段がなくなったけど。」と述べている。津波がどこまで来たというのを、自分の田の段によって語り継がれて認識している。取り上げたこれら 2 例は、自分の所有する物に関連づけて津波の侵入や程度を語っている。

津波到達地点については、いくつかの回答があった。80 代女性は「安政の地震で一番高いはるか向こうの前の高い山、30-50m のところに、漁の道具が上がっていた。お爺さんより聞いた。」と話した。津波の高さを具体的に近くのと山と結び付けて認識している。80 代男性は「古いおじいさんなどから、貝、ウツボなど聞いた。ほら貝の所へ行けるが、車通れない。」と話した。この話では、津波が海岸線から川を遡上して山の方まで行っていることが伝わっている。また、「山の奥に舟つ(ふねつ)というところがある。そこまで船があがっていた。地震の時。漢字が分からんけど、だいぶ行ったところ。お婆さんから聞いたことがある。(80 代女性)」、「古いおじいさんから、川の上まで、近くまで、伝馬が流れてきたという。船止(ふなと)という。川を、潮が上ってきたという(80 代男性)」のような津波に関連した地名で津波の到達地点を認識している回答もあった。

ここに取り上げた事例は、80 代の人がさらにその前の祖父母から聞いている例で、安政南海地震か、それ以前の地震と津波の話と考えられる。

(2) 避難

「母親が南海地震を経験。当時 10 歳。山の方へ逃

げていた。小さい橋で波にさらわれた。気が付いたら、知らん家に坐っていた。助けてもらったんやろ。

(40 代男性)」という話には、どこへ逃げたかという点と、津波にのまれたが助かったという点が伝えられている。「父母から。2 階で寝ていた。階段が外れて降りれなかった。小さい子供がたくさんいて、母親が八幡さんへ 1 人背負って逃げた(60 代男性)」のような、逃げた場所ととこのようにして逃げて助かったという点が伝えられている。避難に関しては「お爺さんが、津波来るぞ一言いよって。昔は堤防がなく、浜だった。その声を聴いて皆逃げた。(60 代女性)」「母が赤ん坊で、負われて逃げた。姉の手をひいて。(70 代男性)」というようにどのように逃げたかということに重点を置いた話が多くみられた。

(3) 地震の様子

聞いたという 62 人のうち、津波の常襲地域のため話としては津波が多いが、地震時の様子については 15 人と少ない。「地震が来た。ドーン。下から突き上げてきた。安政の時は、船が橋のところまで流された。勾配がない。船が川をあがって向こうへ行った。

(60 代男性)」という揺れの様子、「おばあさんが阿南にいた。津波の来ない所だが、地震で筆筒が倒れてきた。梁が折れた。裏山へ避難した。階段が外れて梁が落ちた。(60 歳男性)」「安政のはごつかった。東はつぶれてしもたらしい。小さい木造でミシミシ揺れた。(60 代男性)」と具体的に地震の時に家がどうなったかが伝えられている話や、「昔の人は、地震で、くわばらくわばら(50 代男性)」と地震時の人の心理を表す話などがある。

(4) 教訓

「お婆さんから教えてもらっている。『何も持たんと逃げなさい。家が気になっても戻るな』、亡くなった人もいる。(44 歳男性)」、「モミを出しよって死んだ人がいる。(80 代女性)」のように家や物を気にしないで逃げることを強調する話や、「お爺さんが避難した。近所の人に来て、井戸の水がない。津浪が来る。と言った。山に避難。(50 代男性)」のように、気を付ける点について具体的に伝わっている。しかし、このような話も 62 人中 11 人でそう多くない。

(5) 安政の地震

「安政の時は八幡さんへ水があがった。その時は浜だった。その後かさ上げをした。2段くらい積んだ石かけが違う。(60代男性)」や「安政のはごつかった。東はつぶれてしもたらしい。小さい木造でミシミシ揺れた。(60代男性)」のように具体的に安政という元号で伝わっている例がある。さらに昔の「宝永」などの元号については、言及はなかった。

(6) 移転

家の移転については、62人中3人で、「爺さんがここにいて、津波で浸かった。海のそばが怖いと山の方へ引っ越した。(50代女性)」 「この家は、前は浜にあって、南海地震の後上へ上がってきた。真剣にきいとらんけ覚えていない。(70代女性)」 「家は、元は海の傍で、急に増えてきた。(50代男性)」 という回答があった。1番目の例では、海のそばが怖いと具体的に移転の理由を述べている。聞き取りは、ほとんど南海地震津波被害想定地域で行ったため、このような少ない人数になっているが、高台や津波の来ないと想定されるところで聞き取りをすると、違ったデータになるかもしれない。

(7) その他の対策

移転の他に、地震後に次のような対策がなされたという言い伝えがあった。「お金ない人は、めげてもすぐ建てられるように家を建てた。(70代男性)」 「ここは、南海地震の時、長屋だった。床上1m。水が来ても浸からんように少し高い所に押し入れ作った。(60代男性)」

(8) 他の興味ある内容

① 避難中に赤ん坊がおんぶ紐から抜け落ちた話

これに関連した話は、101人中4人に見られた。

「赤ちゃんのおんぶに男の人の黒い帯で杉尾神社へ上がった。赤ちゃんがいなかった。すっぱぬけた。赤ちゃんの背負いひもは「すけ」という。紐のこと。あれは背負うのに幅が広いし、いい。船が橋のところまで来た。川筋に竹藪があって、魚がかかっていた。(60代女性)」や「19年生まれ。母が、赤ん坊で負われて逃げた。姉の手をひいて。帯1本でおうと

る。うちは逃げられたが。避難所へ行ったら、落としとったというのは聞いたことがあります。前の川、潮がガラガラ引いて行く、だーっと。ものすごい勢いやから、磯がガラガラ。当時ここは、昔は前に家がなかった。堤防は低かった。(70代男性)」という話である。家庭内の被害が語り継がれている例である。話の中のこの黒い帯と言うのは、いわゆる兵児帯（へこおび）だという⁴⁾。

② 現在住んでいる場所の生まれでない人の話

牟岐の生まれではなく、ここへ来て夫の親や祖母から聞いた、と話した人が6人いたが、6人とも女性であった。調査ではこの地の生まれであるかどうかは質問をしていないが、被調査者本人がこの地の生まれでないことを語ったもので、被調査者の中には他にもこのような人がいたかもしれない。「昭和21年の津波は中道まで来た。一番上は浸からなかった。ここ生まれでないの。姑さんから聞いた。お兄さんが東の方で流されて亡くなった。」「牟岐の山の上のほうなので親も知らない。嫁に来た。ここ等の人は山に逃げた。橋のところに船がかかっていた、という。ここらは昔は避難場所がなかった。山への階段は10年ほど前から。義理の親、90歳。南海地震のとき逃げてきた人に、炊き出し。今も炊き出しの準備、ガスもある。」。嫁に来たが、家族からではなく本で知ったという人も一人いた。嫁に来たので、または、婿に来たので言い伝えなどは聞いていない、と理由をつけた回答はなかった。

③ 風化について

冒頭で風化という語を取りあげた。この語り継ぎについての質問は自由回答であったが、風化という語は聞かなかった。

IV. 公的な場における語り継ぎ活動

Ⅲ章では家庭内の語り継ぎについて見た。このⅣ章では、家庭外での語り継ぎについて、公的な一般の語り継ぎ活動として語り継ぎ団体を取りあげる。

1) 語り継ぎをする団体の把握について

地震や津波の災害を含め様々な災害の語り継ぎに

ついて著者は日本各地で聞き取り調査をしているが（Mori2016）、「どのような人が、どのような状況で、語り継ぎ活動をしているのか？」という問いには、日本の各地域で尋ねても的確に回答してくれる人がいないのが現状である。「徳島県に震災の語り部は存在するのか？」という問いについても同様である。過去の地震や津波の被害の語り継ぎ団体の把握について次のように行った。

（1）新聞や南海地震関係の講演会等での語り部の把握を試みた。2016年12月21日は昭和南海地震から70年に当たり、その前後には地元の徳島新聞に「語り継ぐ」と題して被災体験者の話が連載されていた。また、徳島新聞の「昭和南海地震70年語り継ぐ 徳島県内に『語り部』15人」という見出しで、『語り部』として大津波などの惨禍を伝承する活動をしている被災体験者らが、県内で少なくとも15人いる。多くが80～90代の高齢者で、地域の集会や学校などで『地震が来たらすぐ逃げろ』と教訓を伝えている。中略 徳島新聞のまとめでは、語り部をしたことのあるのは阿南市6人、海陽町5人、牟岐町3人、美波町1人（後略）⁵⁾と書かれていた。これ以外で、徳島での語り部として見出しに書かれていたのは1件だけであった⁶⁾。著者は2013年5月から2016年9月まで徳島新聞（一部他紙も含む）の防災関連の記事を949枚コピーをして調査したが、語り継ぎで目立つ記事は上記のようなものであった⁷⁾。

（2）主に海岸部の市町で聞き取り調査を実施した。2013年から徳島で小学校の防災教育の研究や地震や津波について聞き取りなどの折に情報収集をしてきた。語り継ぎをしていると言われている人に2017年11月、2019年3月に訪問や電話取材をして情報を収集した。

（3）北淡震災記念公園の語り部グループと一緒に徳島県海岸部で2017年5月に語り部活動をしてると言われる団体に聞き取り調査をし、2017年12月には阿南市福井町での「災害を語り継ぐワークショップ in 徳島」で語り部団体や語り継ぎ団体の発表内容⁸⁾から情報を収集した。

その結果、語り部と称している2団体と、積極的に語り継ぎに取り組んでいる2団体の存在が確認できた。以下は聞き取りにより活動概要をまとめた。

2) 語り継ぎ団体

（1）阿南市福井町福井語り部の会

福井町（ふくいちょう）は、阿南市の橘湾に面する町であり、津波が想定される場所が2カ所ある。湊地区と後戸（うしろど）地区である。ここでは語り部の会が2012年に湊地区4名、後戸地区4名の計8名で発足したが、高齢のため、2017年現在湊地区2名、後戸地区2名で、福井公民館を拠点に活動をしている。地元の学校で毎年話をしているうちに語り部という名がついてきて現在に至っている。年1回住吉神社で階段と石碑と海を見ながら教職員に話をし、小学校では教室で4、5年生に話をしている。90歳を超える人もおり、平均年齢は70歳後半くらいである。徳島の大学生や神戸からも団体が話を聞きに来た。語り部の一人A氏（81歳）は「小学4年生の時に南海地震があった。家が海拔13mのところにあって、波が行っているのが見えた。子供には事実の伝承をして津波の怖さをしっかりと印象付けなければならない。」と語っている。

（2）美波町西の地きずな会

美波町の由岐地区にある公民館を拠点に男女の役員が20名程度で活動をしている。語り部と呼ばれる人はいない。ここは、過去何回も津波の被害と再生を繰り返してきた。1361年の地震津波を記した日本最古の「康暦碑（こうりゃくのひ）」や貞治6年（1367年）の「貞治碑（じょうじのひ）子安地藏尊」などいくつか石碑がある。きずな会では、昭和南海地震を次世代に語り継ぐ目的で、津波被災者の体験を収録したDVDを製作した。小中学校でこれは教材として活用され、話が継承されている。この地区へは、県内の大学生が実習に訪れたり県外からも視察があり、B氏（73）の場合は、昭和南海地震は地震後12分で津波が来、「津波が来たぞー」という声を聴いた話や、嫁に来たのが地震の直ぐ前で逃げるのに困った人の話、海岸に見に行ったら津波が

押し寄せてきたという人の話などをしている。

(3) 牟岐東昭和南海地震津波語り部の会

この会の前身は1996年に解散した牟岐町南海地震津波の記録を残す会で、その後会長をしていたC氏(87)が地元の小学校で語り部を続けてきた。牟岐東地区では平成26年からは、昭和15年～20年生まれの漁師の人に声をかけて牟岐小学校6年生や牟岐中2年生の防災キャンプの体験講師をしたり、牟岐小学校5年生に毎年防災授業の指導をして、南海地震を語り継ごうとしている。C氏は「海部中学の5年生でした。南海震災は言い伝えを聞いて知っておりました。地震が揺ってすぐ、父親に海蔵寺(かいぞうじ)へ出なさいと言われて、近道を行って観音寺川行ったら第一波が来ていました。引き返して距離が2、300mある高台の海蔵寺へ行きました。住んでいる東の東地区では38名亡くなりました。」と話している。

(4) 南部防災館

この防災館ができて7年になるが、記録としては1名語り部として話した記録がある。浅川には特に語り部として活動をしている組織はない。年齢が70代後半から80代で何人か南海地震の話をする人(例:『震潮記』の作者田井氏)がいるが、語り部という人は見られないということである。語り継ぎをしている一人D氏(83)は「当時12歳で、地震で立っておれなかった。海がふくれてきた。観音さんへという声が聞こえた。逃げ遅れて腰まで水が来たが、裏山は崖で登れない。隣の家から山へ登った。85名なくなった。」という話をしている。この防災館では防災の講座があり、毎年夏休みには小学6年生対象にの津波災害の遺跡巡りを実施している。

3) まち歩き事例の紹介

どのように語り継ぎがなされて

いるのか、まち歩きを通してみたい。取り上げるのは、2例で、上記団体関連のまち歩きへの著者の参加体験の概略である。

(1) 阿南市福井町の語り部によるまち歩き

まち歩きは、昭和南海地震の発生と同じ12月に実施され、所要時間は約2時間であった(第4図)⁹⁾。福井公民館前の集合時に、訪れる場所がわかるようにA3の用紙に地域の地図と石碑写真が印刷された資料が配布された。参加者7名で1台の乗用車に語り部一人と乗り込み、話を聞きながら移動した。もう一台には地元の自主防災会の2名が乗り込んだ。最初に町内中心部の海拔2.4mの所にある避難タワーを見学し、次に湊地区の避難路から小高い山にある地神社(ぢじんしゃ)へ登り町内を展望し避難所を見学した。ここでは、昭和34年伊勢湾台風、昭和35年の



第5図 大原地神上棟記念式記念碑
(右の石碑)(撮影:森)



第4図 福井町のまち歩きの地点

25000分の1の地形図「橋」平成15年更新の一部を加工

チリ地震津波、昭和 36 年第 2 室戸台風で 3 年連続で福井川筋の田（標高 2.7m）が冠水した話、東日本大震災の時の大津波警報の話などがあつた。福井川が蛇行している近くには石碑があり（第 5 図）、以下のように昭和南海地震大津波によって流された様子と、地神社を二年後に再興し崇敬者が上棟式に参列したことが書かれている。

「大原地神上棟記念式記念碑」には南海地震の様子について「昭和二十一年十二月二十一日暁時南海大地震ト共ニ大津浪福井村海岸地一帯ヲ泥海トナシ大原平野ノ田畠モ石原ト流レテ大地大神ノ神床モ崩レ流レテ常ニ地ノ神ノ守護ヲ蒙リタル大原傍示ノ人々聊謝恩ノ意ニ（後略）」（ふるさと福井を写真で残す会 2004）。



第 6 図 住吉神社海嘯痕標石（右下）（撮影：森）

この地域からは東側の山の方へ避難路があり、標高 43m の避難場所も案内された。次に、その山を挟んだ反対側の海岸の後戸にある住吉神社海嘯痕標石（かいしょうこんひょうせき）を見た（第 6 図）。案内の語り部の A 氏が下記の資料を配布し説明をした。

の A 氏が下記の資料を配布し説明をした。

「海嘯潮痕標石 昭和廿一年極月廿一日拂曉大地震動シ稍静マルヤ大音響ト共ニ海水漲溢襲来シ最初当住吉神社ノ石段第六段目迄浸没シー一旦退キ間モナク再来十段ヲ没シタリ此大津浪大戸後戸赤崎大原湊大西古津大宮山下宮宅迄泥海トナリ約半時間後退キシモ負傷五名家屋十二棟船十艘及家畜ヲ流失ス床上浸水百廿七戸衣食殆ト流亡甚困憊ヲ極ム 茲ニ潮痕ヲ標シテ後日に供フ 應需 中西長水記之」

説明に合わせて同行の防災士が階段の 6 段目と 10 段目に立った。この住吉神社の前には、現在防潮堤と防潮扉があり、その前は砂浜になっている。当時は堤防はなく、松林と石垣とその上の軽トラックが通れるくらいの細い道があつた。道も流され内

側の田んぼも被害に遭つた、と説明を聞いた。堤防の防潮扉の横の部分には、話に出てきた石段の 6 段目と 10 段目にあたる高さに印をつけてあつた。

今回のまち歩きは人数が車 1 台分であつたためスムーズに各所での車の乗降がなされたが、参加人数が多く車の台数が多い場合は駐車場所の関係で、先に湊へ行くグループと、先に住吉神社へ行くグループの 2 班に分けて実施される。

(2) 浅川のまち歩き

浅川には過去の南海地震と津波による被害に関連した遺構・遺物が残っている。

2014 年に四国防災・危機管理特別プログラムという防災研修の講座に参加し、海陽町の浅川西自主防災会の会員の案内で約 1 時間半歩いた¹⁰⁾。浅川出張所前で各班 6 名グループで 5 班にに分かれて、それぞれ自主防災会の会員一人がついて案内された。まち歩き用の地図と「徳島県の地震・津波碑（徳島県 2008）」の中の該当の写真資料コピーが配布された。天候は小雨で、参加者は傘をさしたり合羽を着て歩いた。海拔 3.2m の浅川出張所の前の

「震災後 50 年南海道地震津波史碑」「津波十訓」の碑を見て、海拔 14.6m の観音庵へ歩く。観音庵には宝永南海地震の被害を記述した碑が建てられている。階段には津波到達地点を示す石柱がある（第 7 図）。ここのコミュニティセンターには地域の人の集会所と備蓄の部屋があり、中を見学した。街中を歩いて、浅川千光寺へ入り「大地震津浪記」と題された扁額を見、文久元年の年号などを確認した。歩きながら案内の自主防災会の人からは「この人は津波を経験して、また、親からも聞いているので避難の意識は高い」など多くの説明を聞いた。海拔 54.6m の愛宕山緊急避難場所へ登った。急な登り道で、高齢者には困難な印象であつた。まち歩きは避難施設のある高台の南部防災館で終了し、そこで研修が実施された。

V. 考察

第Ⅲ章とⅣ章では、家庭内の語り継ぎと一般の人を対象にした語り継ぎという 2 つの側面から語り継

ぎについて調査をして現状を見てきた。ここではその結果をもとに、考察をしてどのような課題がみられるのか考えてみる。

1) 家庭内での語り継ぎにおける要素

語り継ぎについてその内容を整理した結果、語り継ぐ場合、その内容では、場、または、場所という概念が重要な要素であることが分かった。語り継ぐということは、話す側と受け手側があるが、体験談として話す側でもその出来事の起こった場所を重要と考えているからこのようなデータになっていると考えられる。被災した場所は避難や教訓にも重要な情報であると考えられる。徳島の海岸部では、場所に関連した遺物、遺構が残されている点もその点で重要である。被害が甚大であったから遺構・遺物として残されているとも考えられる。被害の軽微であった他の地域も将来に起こるかもしれない甚大な災害への警鐘として何らかの物や記録を残していくことも必要であろう。

他所から嫁いだ場合でも、家庭内で被災状況などが語り継がれていることが分かった。嫁いできたが…と前置きをして現在住んでいる所の過去の事例を語っており、逆に嫁いできたのでわからないという回答はなかった。そういう点でも、語り継ぎの割合が高いとも考えられる。著者は他県でも地震の折に語り継ぎについて調査をしているが、嫁いできても聞いている例がある一方、他所から来たため現在の場所の災害について家族から伝え聞いていないという回答もある¹¹⁾。今後この地域や他の地域における語り継ぎで、地域の災害をきちんと語り継ぎについでいくためには、地域の防災に詳しい人が、語り継いでいく側としての高齢者の集まる老人会や町内会などで、嫁に来たり婿に来た人にもきちんと語り伝えてもらうという防災教育が必要だと考えられる。

2) 家庭外での語り継ぎの手段

家庭内で伝え聞いていない人が3割あった。この点も分析が必要である。なぜ伝えられていないの

か。理由を挙げた人が二人いた。80歳女性の「古いおじいさんはいなかった。自分の親だけなんで、わからん。」という教えてくれる親や祖父母がいなかったという理由、70代男性の「親が女親だけだったので、学校あがってすぐ働きに行った。15から働いた。」ではその場所にいなかったからという理由である。質問に対する回答は、はい/いいえの他は自由回答だが、直接親・祖父母から聞いたことがない28名の内、40代男性の「近くの人から聞いている。南海大震災は誰が死んだとか。自分のおじいさんとかからはない。」のように、近所の人から聞いたという回答が6名からあった。選択肢として尋ねてはいないため、近所の人から話を聞いている人は他にもいると思われる。町の公報で知っていたという人が4名いた。これも同様で、他にも該当者がいると思われる。このような調査結果から、自分の親や祖父母から聞いていない場合でも、近所の人や町の広報から情報を得ていたり、徳島の海岸部では南海地震による地域の被災状況については家庭内での語り継ぎも含めて地域の大部分の人に語り継がれていることが推察される。家庭外では、地域の災害について知っている人が周辺の人に伝える活動や広報活動が語り継ぎの重要な手段の一つだと考えられる。そういう点からは、次に考察する語り部団体による語り継ぎの活動は意義がある。

3) 公的な場における語り継ぎの構図

上記の語り継ぎの内容について聞きとったり実際に参加して体験した内容を第5表に整理した。そうすると、共通点が多いのに気が付く。話をする人がどの団体も高齢者である。これは、昭和南海地震から70



第7図 浅川観音堂石段
人のいる所が安政南海地震津波襲来地点（撮影：森）

年以上経過しているため、地震と津波の経験者が語るということになると当然である。それぞれが自分たちの地域の被災状況を記した書籍やビデオを所有している。これを参考に話をしたり聞く人に見せたりすることが可能である。どの地域もまち歩きが可能である。事例としてはページ数の関係で福井町と浅川の事例しか紹介できなかったが、被災当時の階段などの場所があり、被災後に建立された石碑等が存在し、臨場感を持ってそれらの場所を見ることができる。また、現在の防災の観点から周辺の避難施設とも組み合わせてまち歩きのルートを設定できる。それらの事物が地域に複数存在することで、短時間でも比較的長めでもまち歩きを設定できる。また、座学として話を聞いたり説明を受けたりする公民館などの場所が存在している。さらに共通しているのは、若い世代に語り継ぐ活動として、語り継ぐ人が小学校へ行って話をしたり、小学生が話を聞きにきたり、また、小学生を連れて震災遺構の神社を訪問して話をしていることがあげられる。

これらをまとめると、災害を体験して語り継ぐ人と聞きたいという小学生などの人々がいて、案内して紹介する地域の震災遺構・遺物が存在し、参考とする資料も存在し、語り継ぎの活動拠点となる施設や室内会場が存在するという構図になっている。

この構図の課題は、条件として亡くなっていくものをどのように補っていくかである。高齢化により昭和南海地震の体験を語る人が減少してきている。いずれ体験を語る人がいなくなる。それをどのようにして補完していくのかが一つの課題である。もう一つ同じようになくなっていく可能性のあるのは、震災遺構や遺物としての海岸線の神社や石碑などである。過去の南海地震の時よりも高い津波が押し寄せてきた場合、海際の石碑などは流されてしまう恐れがある。それ以後は写真だけで良しとするのか、それとも前もって複製を考えるのか、または、移転をするのか、他の補完方法があるのか考えて、2つとも早急な対策が必要である。

4) 世代間の語り継ぎ

家庭内と公の場での語り継ぎについて見てきた。家庭内での語り継ぎについて他県との比較についても若干述べたが、それからすると、徳島県の海岸部では他所よりもよく語り継がれているということがわかる。家庭内の語り継ぎでの調査は、どちらかというと高い年齢層における両親、または、祖父母からの語り継ぎであり、自分たちの世代から子供たちへの語り継ぎについては調査をしていないためデータがなく不明である。しかしながら、「安政の時、井戸水がひたりする時は必ず津波が来る、と若い時に年寄りに教えてもらった。(中略)ひ孫が中一、その子にも伝えてある。井戸のふたをせんと時々井戸見いよと言ってある(80代女性)。」¹²⁾という回答もあり、断片的ではあるが次の世代にも伝えられていることがわかった。

伝えられる子供の側については状況はどうであろうか。著者は防災教育について2013年から徳島県の海岸部の小学校等で聞き取り調査をしているが、各校の防災学習や行事の報告で地元の人の話を聞く項目があげられているのを確認している。第5表であげた地区を例に見てみる。福井町の隣町の津乃峰小学校では、「津乃峰町の地図を見ながら、南海地震による地域の被害やその当時の様子について学びました。膝まで津波が来る中を弟の手を引いて山まで逃げたことや橋が流されてなくなったこと等を話してくださいました(2015)」¹³⁾という報告がある。また、美波町由岐地区の木岐小学校6学年は、南海地震の津波を体験された地域の方々の証言DVDから昭和南海地震のとき旧由岐町はどのような被害があったのかを学び、防災への意識を高めるという授業を受けている(2013)。1学年には「シロのないた海」という絵本を使用している¹⁴⁾。

このよう語る側と聞く側の事例を見ると、公の場でも高齢者から若い小学生に確実に災害が語り継がれていることがわかる。

5) その他の課題

第5表でも確認したが、各団体では語り継ぐ人の高齢化が進み、亡くなる人があったり、人前に出て

話をするができなくなっている現実がある。中には、牟岐町の語り部の会のように年齢的にもう少し若い層を誘って続けている団体もあるが、全般的に厳しい状況にある。どのように次の年代に受け継いでもらうかが課題である。

各団体への聞き取りで判明したのは横のつながりが無いということである。それは、上記で見てきたように、自分たちの地域で語り継ぐための条件がそろっており、他に学ぶ必要がないからであるとも考えられる。これから昭和南海地震の体験者がいなくなっていくことを考えると、語り継ぎについてお互い知恵を出し合い、お互いの良いところを取り入れて、語り継ぐ人を育成していく必要がある。

VI. おわりに

語り継ぎの現状と課題を、徳島の海岸地域を例に見てきた。この研究の成果としては、3つあげられる。

1つ目は語り継ぎについて客観的にデータの形で示すことができたことである。語り継ぎの現状として、徳島の海岸部では家庭内でおよそ7割の人が親や祖父母から南海地震の語り継ぎを受けており、他所と比較しても高い割合であること、内容としては、被災の場所、避難、教訓などが多いことが分かった。回答では風化という言葉は聞かなかった。

2つ目は、公の場で一般の多くの人に語り継ぎをしている人や語り部について把握できたことである。積極的に組織的に活動している団体が4団体あり、それぞれ、被災時の資料を持ち、津波被害の遺構・遺物があり、それらを参考にまち歩きをしたり自分たちの施設で語り継ぎをし、地元の小学生にも話をするなどの活動をしているという同じような構図が把握できた。著者が語り部の条件について関心を持って以前に調査した結果も似たような構図になっている (Mori, 2016)。1995年の兵庫県南部地震の震災の語り部は、場として北淡震災記念公園があり、地震の遺物として野島断層があり、話を聞く人として一般の人や小学生などが訪れている。南海地震の語り継ぎでは徳島の海岸部を取りあげたが、こ

の地域でも同様な構図が確認できたのは成果である。今後語り継ぎをしていく地域では、このような条件を整備していくとある程度語り継ぎができると考えられる。

3つ目は、大きな課題として、現在語り継ぎを実践している体験者の減少と継承をしていく人の育成があげられる。そのためには、現在あまり交流がない他地域の語り継ぎ団体と連携していくことも考えて行かなければならない。

最後に、語り継ぎの研究という点からは、小学校などでの外部講師による地域の災害についての話の状況と児童や生徒への語り継ぎの効果について、防災教育の観点からも今後調査が必要であると考えられる。また、今回は、家庭での語り継ぎと公共の場での一般の語り継ぎについて団体を取りあげて調査をしたが、伝える側は地域内でどのように語り伝えられているのか、受け継ぐ側はどのように語り継がれているのかという点も重要で、調査が必要であると考ええる。

現在、阪神・淡路大震災の被災地である淡路島や神戸では震災から24年が経過した。さらに40年弱が経過して震災70年となった時、徳島のように見て回る所はあるだろうか。東日本では大震災から8年である。現在、語り部が現地案内やバスの車窓で案内する場所がだんだん少なくなっている。さらに60年たった時、東日本の被災地はどのようなになっているであろうか。徳島では、今後南海トラフ地震が発生して過去の津波より大きな津波が襲来する場合は、現存する石碑等が失われる可能性があり、今のうちに複製品作製などの対策も必要であろう。過去から学び将来に活かすという観点からもこの研究結果が参考になれば幸いである。

付記

本稿は、兵庫地理学協会2018年度春季例会発表をもとにまとめたものです。

謝辞

2015年徳島県南部の地震後に牟岐町の住民の皆

様に地震の聞き取りでお世話になりました。阿南市福井町語り部、福井町公民館、美波町西の地防災きずな会、牟岐東昭和南海地震津波語り部の会、徳島県立南部防災館の皆様には情報を提供していただきました。2014年実施の四国防災・危機管理特別プログラムのまち歩き、2017年12月開催の「災害を語り継ぐワークショップ in 徳島」でのまち歩きの内容も参考にさせていただきました。また、北淡震災記念公園語り部ボランティア事務局にもお世話になりました。記して感謝といたします。

注

- 1) 全国の被災地の語り部の参加を得て第1回目の「全国被災地語り部シンポジウム in 東北」が2016年3月に2日間開催され、1日目は東北地方の語り部を中心に300名ほど参加者があった。
- 2) 鳴門史学会 2016年度研究大会「災害と歴史資料―守り、読み解く―」2016年11月13日、於徳島県立文書館や、昭和南海地震70周年「先人からのメッセージ 講演会&調査報告会」2016年12月4日、於レキシルとくしま
- 3) 『論理的な話し方を育てる指導（藤原宏監修 1989）』を見ると、小学校の入門期の話し方の指導においては、基本文型（誰が、いつ、どこで、なにを、どうした）の順序で話し書かせるという指導について書かれている。これらの要素は話し方の基本として小学生のころに学習されている。
- 4) 兵児帯（へこおび）とは「簡単に締める帯の一種。…六尺（約1.8m）の丈の木綿を…丈も長くなり、黒、藍、焦茶などの総絞りが流行し、現在でも、丈の両端にわずか絞りを付したのが一般に使われ…」（相賀 1971）
- 5) 昭和南海地震70年語り継ぐ 徳島県内に「語り部」15人。徳島ニュース、徳島新聞、http://www.topics.or.jp/localNews/news/2016/04/2016/_14611972661459.html、2017年5月17日閲覧
- 6) 土井良典：70人の群像⑦ 古文書に残る教訓を世界に。津波の語り部 田井晴代さん、徳島新聞、2014年2月16日、p3.
- 7) 3年5か月の間に、主に朝刊の防災関連の記事をA4～A3サイズでコピーをし、収集した。1週間単位くらいで新聞を大まかに概観して防災関連（防犯、危機管理も一部含む）の個所をコピーしたため見過ごした記事や、抜けている日もあると思われる。1枚のコピーに複数の防災関連の記事も見られることがあり、記事の数としては、全体で1200件くらいあるのではないかと考えられる。付記として、徳島での過去の南海地震に関して「風化」という語の含まれる見出しの記事は見当たらなかった。
- 8) 2017年12月9日に実施され、参加した語り部や語り継ぐ人々は第5表の団体と地域の人々、淡路島の北淡震災記念公園震災の語り部ボランティアであった。
- 9) 2017年12月9日「災害を語り継ぐワークショップ in 徳島」の一部として実施されたものである。
- 10) 2014年7月19日に実施されたもので、まち歩きはプログラム主催者が設定し海陽町危機管理課の協力で実施された。ルートは一般的なものである。このプログラムは香川大学と徳島大学共同開設で、大学生や社会人が2年間受講し、防災士の受験資格も得られ、大学生は単位取得もできる。
- 11) 2018年4月9日の島根県西部の地震での聞き取りでは、70代女性の「伝えない。父母もあまり知らない。母がここの生まれでない。父は私が幼い時に亡くなった。」という回答があった。2015年7月13日の大分県西部の地震での聞き取りでは、50代男性の「聞いていない、よそから来たので。」という回答があった。
- 12) 「井戸水がひたりするとき」というのは方言で、「井戸水がひいてなくなっていく」という意味

である。牟岐では、「井戸水が増えてきたりすけなくなる（少なくなる）時の、少なくなる時に言う。牟岐では一般に言うが、今は井戸がないので言う機会がない（モラスコむぎ職員談）。徳島県立図書館、牟岐図書館、海陽町博物館で方言の資料を調べていただいたが、該当の方言は見つからなかった。『角川古語辞典』（1967）には「干る」②潮がひく。「川の水ひて、悩み煩ふ」（p.897）とあり、語源と推察される。淡路島福良でも使う。この話は2つの点で興味深い。一つは子供への防災の語り継ぎの点である。2つ目は方言が子供に語り継がれている点である。

- 13) 阿南市立津乃峰小学校小学校資料、2015年度「子供の命と未来・夢を一地域と共に、主体的に行動する防災教育を目指して」
- 14) 美波町防災教育推進協議会資料、木岐小学校平成25年度「防災学習実践事例（ふりかえり）」による。『シロのないた海』は飯原一夫作、徳島県海南町1994年の発行で、31ページ。

文献

- 相賀徹夫編（1971）：大日本百科事典ジャポニカ、小学館、16、p.177.
- 海南町役場（1986）：南海地震津波の記録「宿命の浅川港」、海南町役場、114p.
- 木村昌三・小松勝記・岡村庄造（2002）：歴史探訪南海地震の碑を訪ねて 石碑・古文書に残る津波の恐怖、毎日新聞高知支局、159p.
- 阪本真由美・矢守克也（2010）：災害ミュージアムを通じた記憶の継承に関する一考察—地震災害のミュージアムを中心に—、自然災害科学 J. JSNDS, 29-2, pp.179-188.
- 佐藤翔輔（2015）：「災害の経験を伝える」活動の最新動向—「災害語りつぎ研究塾」の合宿活動をもとにして—、口承文芸研究, 38, pp.42-51.
- 白石太良・米原俊一（2018）：被災した集落遺産のその後—鳥取県中部地震による倒壊後の金比羅燈籠を例に一、近畿民俗学会報『近畿民俗』, 184, pp.25-45.
- 四国クリエイト協会（2016）：四国災害アーカイブス活用の手引き、四国災害アーカイブス事務局、6p.
- 新村出編（1992）：広辞苑第4版、岩波書店、pp.789, 2213.
- 田井晴代（2006）：阿波国宍喰浦地震・津波の記録 震潮記、田井晴代、113p.
- 高野尚子・渥美公秀（2007）：語りによる阪神・淡路大震災の伝承に関する一考察—語り部と聞き手の協働想起に着目して、ボランティア学研究, 8, pp.97-119.
- TeLL-Net フォーラム実行委員会（2015）：世界語り継ぎネットワーク (TeLL-Net) フォーラム：災害ミュージアムを通じた被災経験の語り継ぎと防災・減災報告書、TeLL-Net フォーラム実行委員会、27p.
- 徳島県教育委員会教育文化課（2016）：阿波国地震津波碑ガイドブック、徳島県教育委員会教育文化課、14p.
- 徳島県史編さん委員会（1967）：徳島県史、徳島県、6、p.584.
- 徳島県立文書館（編）（2016）：知ろう学ぼう記録資料に見る南海地震、徳島県立文書館、12p.
- 徳島の古文書を読む会五班（2008）：嘉永七年大地震の記・南朝以来地震抄録、徳島県立文書館.
- 南海道地震津浪の記録 海が吠えた日：津波デジタルライブラリィ、<http://tsunami-dl.jp/document/054>、2017年12月6日閲覧.
- 西の地防災きずな会（徳島県美波町由岐地区）（2011）：ビデオ「語り継ぐ・昭和南海地震」Disk1, 2.
- 濱井宣明（2014）：明治期の吉野川洪水の実態把握に関する研究、徳島大学大学院先端技

術科学教育部博士論文.

藤原宏（監修）・北園康夫（編）（1989）：論理的な話し方を育てる指導，明治図書，pp. 16, 17.

ふるさと福井を写真で残す会（2004）：写真で歩くふるさと福井，福井公民館，p. 59.

牟岐町史編集委員会（1976）：牟岐町史，牟岐町，pp. 934-956.

森康成（2018）：防災教育における震災の語り部活動の分析と提案 野島断層とその被災地を事例として，安全教育学研究，17，3，47-58.

森康成・中野晋（2018）：南海トラフ地震津波被想定地域での地震時の初動行動の研究 2015徳島県南部地震と兵庫県、愛媛県、三重県で発生地震の比較から，兵庫地理，63，107-120.

森康成・中野晋（2015）：地震発生時の住民の対応行動にみる現状と課題—淡路島地震と兵庫県南部地震における淡路島住民の意識調査から—，兵庫地理，60，pp. 1-14.

Mori Yasushige (2016) : Educational Analysis and Suggestion on Narrative Accounts of the Earthquakes in the Disaster Hit Areas around Japan, Draft proceedings, 4th International Conference on Urban Disaster Reduction Sustainable Disaster Recovery: Addressing Risks and Uncertainty October 17-20, 2016, Wellington and Christchurch, New Zealand, (4 ページ、ページ番号記載なし).

（もり やすしげ 北淡震災記念公園震災の語り部ボランティア）

第5表 徳島県南部の海岸部各町の語り継ぎ団体の活動紹介（2017年12月現在）

町名	団体の名称	活動開始年	活動人数	年齢	語り継ぎに使用・紹介する文献資料	案内する震災遺物、遺構、石碑、**	現在の防災関連施設 **	室内会場	地元の小学生に話
阿南市福井町	阿南市福井町語り部	2012	4人	高齢者	『写真で歩くふさと福井』	住吉神社階段(昭和南海地震) 地神上棟記念碑(昭和南海地震)	防潮堤 地神社の避難所 避難タワー Wa ンダーランド避難施設	福井町公民館	あり
美波町由岐	美波町西の地防災きずな会	2004	約20人	高齢者	DVD「語り継ぐ・昭和南海地震」	由岐康暦碑(正平南海地震) 貞治碑(子安地藏尊)		由岐公民館	あり
牟岐町	牟岐東昭和南海地震津波語り部の会	1990開始、1996中断、2014再開	7人	高齢者	『南海道地震津浪の記録 海が吠えた日』	大震潮記念碑(安政南海地震、昭和南海地震) 大牟岐田公園石碑(昭和南海地震)		牟岐町公民館東の中間館	あり
海陽町浅川	徳島県立南部防災館	2009	数名*	高齢者	『宿命の浅川港』、『阿波国穴喰浦地震・津波の記録震潮記』	震災後50周年南海同地震津波史碑 観音堂と石段・津波襲来地点石碑 標・宝永の津浪碑 浅川千光寺「大地震津浪記」扁額(安政南海地震) 浅川御崎神社「大地震津浪記」(安政南海地震)	コミュニティセンター観音庵 愛宕山避難場所	徳島県立南部防災館	あり

* 決まっておらず、時に依りて依頼、** ここに取り上げた他にもあるが表には事例として紹介